

階層性と〈文化〉の位置——ブルデューの理論枠組から

佐藤 富雄

はじめに

フランスの社会学者P・ブルデューは社会の階層的再生産の一契機として、〈文化〉の重要性に注目する。例えば、彼の用いる「文化資本」という概念は、その資本という名称に多少の問題があるとしても、文化的諸要素が社会の再生産に対して占める重要な位置を表現するための戦略的な概念となっている。「文化資本」という概念によって文化をとらえることによって、文化内容がそれ自体として自己完結するのではなく、経済的・社会的利害と密接に結びついている側面が強調される。広い意味での教育をおおして伝達される文化内容の習得は、経済的利得を生み出し、社会関係の形成に大きな影響を与えるとされるのである。本稿では、ある意味で特殊社会的なブルデューの〈文化〉のとらえ方を、彼独自の社会理論の枠組の紹介をおおしてみ

ていこう。

一 主観主義と客観主義

ブルデューは主観主義と客観主義の対立が社会科学を二分する対立のうちで最も根の深い対立であると考えている。同時に、これらの相対立する認識様式は社会的世界を対象とする科学にとって必要不可欠であることを認め、両者の科学的成果を保ちつつその対立を乗り越え、両者を統合しようと試みている。

『再生産』の冒頭で、ブルデューは次のような基本命題を社会科学において必要不可欠なものとして提示している。「象徴的暴力としてのあらゆる権力、すなわち意味を強制し、自らの力の基礎である力の諸関係を隠蔽することによって意味を正統なものとして強制することに成功するあらゆる権力は、その固有な力、すなわち本来的に象徴的な

力を力関係につけ加えるのである。」(Bourdieu, 1970, p. 18)

「象徴的な諸関係の相対的な自律性と依存性という特徴を同時に表現する」この命題を否定したならば、「諸個人ないしは諸集団の創造的自由を、実行の客観的条件に対して自律的とみなされた象徴的行為という原理に置く」(主観主義)か、「存在の物質的諸条件に対して象徴的行為が自律していることを一切拒絶し、自律したものである」としての象徴的行為を無に帰さしめる」(客観主義)ことになるとしている。すなわち、ブルデューは主観主義と客観主義の統合を目指して、文化的再生産論における最も基本的な命題を提示するのである。

主観主義と客観主義の統合を試みる命題を提示するにあたって、ブルデューは、デュルケム、マルクス、ウェーバーの評価と批判を行なっている (Bourdieu, 1970, pp. 18-9)。

デュルケムに関しては、諸表象による拘束の外在性を強調するあまり、人間が社会秩序を構成しているという主観主義的視点が欠落している点が指摘される。マルクスに関しては、正統性のイデオロギーの基礎にある力関係を明らかにすることに固執し、ウェーバーにみられるような、被支配者による支配の正統性の承認が力関係に与える象徴的効果を過少評価しているとしている。また、ウェーバーに

関しては、正統性に関する諸表象が権力の行使と永続化に対して行なう貢献、すなわち主観的意味構成が客観的力関係の対して行なう貢献を自らの研究対象としている点を評価しつつ、社会的諸関係が力関係であるという客観的真理を見誤らせてしまう社会的なイデオロギー機能をマルクスのように問えなかった欠点を指摘する。①諸表象の外在的拘束性(デュルケム)、②正統性のイデオロギーに対する力関係・暴力関係による規定性(マルクス)、③被支配者による正統性の承認の支配の正統性に対する貢献(ウェーバー)、をそれぞれ評価し、力関係と象徴的関係を接合すべく、それらを統合する諸命題を提示しようと試みたのが『再生産』におけるブルデューといってもよいだろう。

また、プラテイク論を展開するにあたって、ブルデューはより現代的な主観主義と客観主義の対立を克服の対象としている (Bourdieu, 1980a, pp. 43-9)。⁹⁾主観主義としては現象学的社会学やサルトルなどの現象学的認識様式が、客観主義としてはレヴァストロースなどの構造主義や記号論などがあげられている。現象学的認識様式に対しては、社会的世界の生きられた経験の記述を可能とした点を評価しつつも、経験を可能とした固有な客観的条件への問が排除されてしまっている点を批判する。構造主義や記号論に対しては、個人の意志や意識から独立した客観的規則性

(構造、法則、関係システムなど)を確立しようとするあまり、社会的世界についての客観的科学与先科学的経験の科学的記述との同一視を拒否してしまつたために、社会的現象学によって明らかにされる生きられた意味と構造主義や記号論によって構成された客観の意味との関係を明らかにできない点を批判する。すなわち、自己自身に對する透明な意識作用の認識か、決定された外在的事物の認識かという二元論的観点を批判するのである。

ブルデューは主観主義と客観主義の両認識様式および兩者の無益な対立を批判してはいるが、決して兩者の学問的成果を否定しているわけではなく、むしろ兩者の成果を受け継ぎつつ、主観主義的・客観主義的な学問的認識様式が暗黙のうちに係わっているプラティークの理論を明らかにだし、独自の実践的認識様式(プライティークの理論)を提示することによって兩者の統合を試み、真に科学的な成果の産出を目指しているのである。

二 身体化と客体化

以上のような学問的志向のうちで、ブルデューは様々な分野において独自の社会理論を構築している。そのうちで最も有力な枠組が、「身体化されたもの」(incorpore)と「客体化されたもの」(objective)」という概念である。極

端な主意主義的行為理論もまた極端な構造決定論も批判し、兩者を回避するために「身体化されたもの」と「客体化されたもの」の結合としてのプラティーク(日常の実践行為)をとらえる。ブルデューが「身体化」と「客体化」をどのように説明しているかをみてみよう。

まず、理解の比較的容易な「具体化された歴史」(histoire incarnée)と「身体化された歴史」(histoire incorporée)」という枠組からみて、こう(Bourdieu, 1980b)。ブルデューは歴史的現在が「具体化された歴史」と「身体化された歴史」によって構成されると考える。具体化された歴史とは、客体化・制度化された歴史であり、建物、書物、理論、慣習、法律など具体的な事物や制度などに蓄積された歴史を指す。ただし、これらの客体化・制度化された歴史は、具体的に活動する行為者を欠いては歴史的現在として機能することはない。身体化された歴史とは、アスピレーション、能力、嗜好など個々の行為者の身体の内蓄された歴史を指す。身体化された歴史もまた、具体的な対象としての事物・制度などを欠いては現実のものとはならない。二つの歴史が結び付いてはじめて、歴史的現在として歴史が活性化されるのである。例えば、日本文学の古典の書物が眼の前にあるとしよう。もし、私に古典を読むという欲求、さらには読む能力がなければ、その書物はただの紙の束でしかない。また、民主主義的な政治的制度

が法的な条文として存在していても、積極的にしろ消極的にしろ、それを支え、そこに参加する意欲と能力をもった人々が存在しなければ、制度としては実質的に機能しないだろう。逆にいえば、そうした具体化された書物や制度が存在しているということは、それらを現実的なものとする行為者が存在しているということでもある。

諸個人のプラテイクは、身体化された歴史のみによって実現するものではなく、また具体化された歴史への従属のみによって行なわれるものでもなく、相互に規制されつつ両者の歴史のハーモニーのうちに実現されるのである。個々の行為は、行為者の意識や意欲と客観的な条件とのハーモニーのなかで実現されると言いかえることもできる。

ただし、ブルデューによれば、個々の意識や意欲に基づいて客観的物質的・制度的条件のなかで行なわれるプラテイクは、結果として社会のなんらかの客観的意志に従属することになるとされる。行為者は、自らの身分や地位を向上、維持させるために特定の領域において有効な特殊資本（例えば、学歴や資格、特殊な能力など）を増加あるいは維持するべく競争を余儀なくされている。この競争ゲームは、ゲームへの信仰や行為者を動かす身についた性向・アスピレーションによって支えられ、競争のなかで行為者は相互の作用・反作用によって生じる強制に互いに手を貸すことになる。この強制は、結果として個々の行為者のプラ

テイクを社会の単一の客観的意志に従属させることになるとするのである。資本主義的生産様式における自由競争を考えてみれば理解できるだろう。したがって、既存の社会構造、制度の再生産を分析するにあたっては、身体化された歴史の分析が重要な位置をしめる。

次に文化資本という概念についてその枠組をみていこう (Bourdieu, 1979a)。文化資本とは、ブルデューが文化的再生産論を展開するにあたっての鍵概念の一つである。ブルデューは、文化資本を①身体化された文化資本、②客体化された文化資本、③制度化された文化資本の三つに分ける。身体化された状態にある文化資本とは、「有機体の持続的性向の形態」にある文化資本であり、後に述べるハビトゥスとの関連でみれば、認知・動機づけのシステムや種々の能力をも含むものである。当然のことながら身体化は出人によって行なわれえず、その結果、文化資本は身体のもつ生物学的限界を共有し、経済資本のように他人に譲渡することはできない。客体化された状態にある文化資本とは、「絵画、書物、辞書、道具、機械といった文化財の形態」のもとにある文化資本である。物質を基盤とするこの文化資本は、経済資本と同様に譲渡可能であるが、それが資本として機能するためには、身体化された文化資本を必要とする。例えば、所有する機械を使用したり、絵画を鑑賞したりするためには、特定の知識や価値観などの身体

化された文化資本を必要とするからである。制度化された文化資本とは、学歴や資格などといった制度的に保証された文化資本であり、「伝統的、持続的、かつ法的に保証された価値を資格の保有者に授ける」ものである。制度化された文化資本もその獲得にあたっては、身体化された文化資本の裏打ちを必要とするが、いったん獲得されると能力証明をすることなく通用することになる。ただし、特定の身体化された文化資本を前提することは当然である。

文化資本に関しても、身体化された文化資本がキーとなる。社会の文化的再生産を論ずるにあたって、身体化された文化資本の獲得、継承が既存の社会構造、階級構造の再生産をもたらすと考えられている。

最後に、「ハビトゥス、プラテイク、構造」というブルデューの社会学論の基本的枠組についてみてみよう(Bourdieu, 1980a, pp. 97-109)。「身体化」が「身体化された歴史」「身体化された資本」など様々なかたちで表現されるが、それらを包括するものとしてハビトゥスはとらえられる。

ハビトゥスとは、身体のうち「(プラテイクを)構成する構造として機能することを定められた(歴史的に)構造化された構造」と定義される。それは、諸個人のうちに身体化、内面化された認知・動機づけのシステムであり、性向のシステムであって、具体的には、諸個人の知識・能力、価値観、身体技法などである。こうしたハビトゥスは、日

常の活動・行為であるプラテイクを産出し組織化する原理として位置づけられている。歴史的に構造化されたハビトゥスは、歴史的に産出された客観的構造に適合的なプラテイクを産み出す傾向を有するという意味で構造に規定される側面をもつが、同時に、眼前の客観的構造の内在化の産物ではなく過去の歴史の内在化の産物であるがゆえに身体の外部に定められた客観的な選択肢から逃れることが可能であり、眼前の客観的諸条件に対して一定の自律性を有するものとされるのである。

ハビトゥスはプラテイクを産出する原理として働くが、ハビトゥスだけでは現実のプラテイクを説明できないとされる。プラテイクは、プラテイクを産出したハビトゥスの構成された社会的条件とハビトゥスが機能する現実の社会的条件とを関係づけることによってのみ説明が可能だとされるのである。いいかえれば、プラテイクの理論は、身体化された歴史と客体化された歴史、身体化された資本と客体化された資本とを対置させることによって、プラテイクに、現実の必然性と緊急性からの距離を与え、ハビトゥスおよび客観的構造からの相対的自律性を与えるのである。プラテイクはハビトゥスと構造によって規定されているが、その両者から規定されているがゆえに両者からの相対的自律性を獲得することが可能なのである。ただし、ハビトゥスは、客観的構造に適合的傾向を有する

がゆえに、一般的には、構造を再生産するようなプラテイクを産出することになる。文化的諸要素は、教育などの社会化のプロセスをとおして、プラテイクの産出原理であるハビトゥスの形成に多大な影響を与えることになるのである。

三 文化の階層性

ブルデューは、〈文化〉がその文化内容ゆえに社会のなかで正統性を有するとは考えない。また、諸個人の文化的嗜好をその嗜好対象がもつ属性によるものであるとも考えない。ブルデューにとって、〈文化〉および〈文化的欲求〉はあくまで社会的あるいは階層的なものなのである。『再生産』(1970)では、特定の恣意的文化は支配階級の(物理的・象徴的な)客観的利害を完全に表現しているからこそ、特定の社会構成体において支配的な位置に置かれていると論じており、『ディスタンクシオン』(1979b)では、カリマスのイデオロギーが正統的文化に関する趣味を自然の賜物ととらえるのに対して、科学的な観察は文化的欲求が教育の産物であることを示していると述べられている。

我々は、なぜ特定の文化内容を「正しい」もの、あるいは伝達すべきものとして子どもたちに伝達するのだろうか。なぜ特定の文化内容が教えるべき正統性を有するとみなす

のであろうか。ブルデューは教育という働きかけの行為が次のようにとらえている。

「すべての教育的行為は、恣意的権力による文化的恣意性の押しつけとして、客観的にみれば象徴的暴力である。」

教育的行為は、文化的恣意性の押しつけとらえられる。文化が恣意的であるというのは、特定の集団や階級の文化における意味の選択がいかなる普遍的・精神的諸原理からも演繹されず、必ずしも事物や人間の本性と結びついていないという意味においてである。我々は、すでに日常的な異文化体験や文化人類学などの成果によって、自らの文化のあり様が唯一絶対のものではないことを認識させられている。にもかかわらず、家庭や学校において特定の文化内容(意味の選択)を正統なものとして伝達しようとする。

さらにいえば、意図するとしなにかかわらず、教育という力関係のなかで恣意的な文化内容を正統的なものとして強制する。こう書くと、おそらく、「私は、子どもにある特定の内容を教え込むことはせず、考える素材を提供するだけだ」という反論がでてくるにちがいない。しかし、その場合、子どもが自ら考えるための素材の選択はどのように行なわれるのだろうか。素材の選択における限界づけに正統性を持たせていないだろうか。さらにいえば、「自ら考える」というある意味で近代的な思考態度を押しつけることにはならないだろうか。その時、自ら考えて行動できる

人間とそうではない人間との間に序列づけが生じたとしても不思議ではない。

教育のなかで伝達される文化内容は、子どもの所属する集団・階級によって異なる。それは、日常の身体技法・言語能力、知識、価値観、アスピレーションなど広範囲にわたり、純粹に個人的な好みや対象自体の属性に起因すると考えられがちな芸術や文学に対する嗜好もその例外ではない。ブルデューは、アンケート調査の分析をとおして、文学・絵画・音楽などの文化活動とそうした文化に対する嗜好が、社会的出自と教育水準（これもまた社会的出自と相関する）とに結びついていることを明らかにしている。

文化活動や文化に対する嗜好は、階層的に中立的なものではなく、「粗野で通俗的な、卑屈で金銭ずくの程度の低い喜びの否定」が、「崇高で洗練された、利害とは無関係の無償性をもつ上品な喜びに満足できる人々の優越性の肯定を意味し」、したがって芸術と芸術の消費は社会的差異を正当化する社会的機能を果たす傾向があるとされるのである。そして、この芸術を消費・鑑賞する能力は、すでに述べた文化資本の一種にはかならない。

経済資本（資産）などの直接的かつ可視的な継承・相続が、社会的不平等解消の観点から相続税などによって社会的な統制をうける傾向が強いため、巧妙に隠蔽された資本継承としての文化資本の継承は、きわめて有効な階層再

生産の戦略となるのである。子どもに対する、お稽古ごとなども含めた教育投資、躰や言葉遣いに関する熱心さ、文化的環境の整備などの階層差を思い浮かべてみれば理解できらるであろう。

われわれは、家庭や学校などをとおして、知識や技術のみならず、アスピレーションやエートス、価値・規範なども内面化し、自らの身体のうち文化資本を蓄積する。そして、文化資本は客体化された文化資本と結びつくことをとおして、経済的・社会的利得に転換される。例えば、コンピュータの重要性を認識し、それに関する知識・技術を習得することは、職業選択において有利に働き、より多くの経済的収入に結びつく可能性のあることは容易に想像できる。ただ、音楽を鑑賞しようという性向とそれを鑑賞するために必要な知識は、個人的な充足以外になんらの経済的・社会的利得をもたらさないかのように思える。しかし、音楽の鑑賞が一定の社会的意味を有する集団においては、音楽に関する知識が個人的充足以上の社会的な意味をもつ。たとえば、ピアノを弾く技術が、個人的な楽しみを越えて、配偶者選択において少なからず有利に働くことを考えてみればよい。もちろん、投資量と効率しだいでは「音楽家」になることも可能である。特に、芸術的趣味・嗜好など、家庭における幼児期からの身体化を不可欠とする文化資本の継承は、他の階層からの参入が難しく、階層

の再生産の有力な戦略となる。

以上のように、階層によって左右される身体のうち、に内面化された文化内容Ⅱ文化資本は、経済的・社会的利得（ブルデューの用語では経済資本および社会関係資本）へと転換される可能性を有し、さらに、身体化された文化資本の価値を持続的に保証する制度化された文化資本（学歴、資格、免状など）は、その可能性を継続的に保証することになる。

日本では、急速な産業化・近代化にともなって急激に階層構造が変動する中で、階層の再生産よりもむしろ階層移動のあり方に注目が集められてきた。しかし、先進産業国となった現在、階層は安定化傾向をみせている。様々な分野で「二世」が話題となっている状況はその一つの表れであろう。隠された資本継承としての文化資本の継承のあり方、それに伴う文化の階層性の問題は、階層研究のみならず〈文化〉の研究にとっても重要なものになるにちがいない。

参考文献

P. Bourdieu et J.-C. Passeron, 1970, *La reproduction*, Ed. de Minuit.

P. Bourdieu, 1979a, 'Les trois états du capital culturel',

Actes de la recherche en sciences sociales, 30.

1979b, *La distinction*, Ed. Minuit.

1980a, *Le sens pratique*, Ed. de Minuit.

1980b, 'Le mort saisit le vif: les relations entre l'histoire réifiée et l'histoire incorporée', *Actes de la recherche en sciences sociales*, 32-33.

P・ブルデュー (Pierre Bourdieu 1930-) 文献抄 (カッコ内は原著発行年)

『ディスタンクシオンⅠ』石井洋二郎訳、新評論、一九

八九年(一九七九)

『実践感覚Ⅰ』今村仁司・港道隆訳、みすず書房、一九

八八年(一九八〇)

『構造と実践』石崎晴己訳、新評論、一九八八年(一九

八七)

「知の場と創造投企」荒川幾男訳(ブイヨン編『構造主義とは何か』みすず書房、一九六八年(一九六六)所収)

その他、雑誌『アクト』(日本エディタースクール出版部)に翻訳、紹介論文が掲載されることが多い。特に第一巻(一九八六年)はブルデューの特集となっている。

本稿は一九八八年度跡見学園特別研究助成費による研究成果の一部である。

(おとう とみお・社会学)